少年の犯罪心理

荒川　葵

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．犯罪の心理的要因
Ⅲ．少年の犯罪心理
Ⅳ．少年たちへのアプローチ
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

この２年間、ゼミナールで少年法にまつわる様々な問題について議論を重ねてきた。昨年度のレポートでは、少年法の存在意義をテーマとして扱った。成人が適用される刑法とは異なる特別措置として定められ、少年の更生を目的とした、健全育成のために存在していることを学んだ。

凶悪な少年事件などを見てきて、自分には到底理解できない行動であり、どこか遠い世界の話のように感じていた。これまで生きてきた中で、犯罪を犯したことも、その現場に遭遇したこともない。少年犯罪が身近ではない環境で生きてきたからである。少年法について学習していく中で、なぜ少年たちは非行をするのか、という漠然とした疑問を持つようになった。そこで本レポートでは、心理的な観点から考察しようと思う。人はそれぞれ異なる考え方を持ち、様々な環境で生きているため、10 人いれば 10 通りの考え方があり、犯罪をなぜ犯すのかといった答えを出すことは難しい。そのため、十人十色だからこそ、心理学の観点という、よりパーソナルな部分に焦点を当てることで、犯罪のメカニズムについて学び、アプローチ方法を考案したい。そして、少年の犯罪心理を取り扱うことにより、昨年度考察した少年法の存在意義について、さらに理解が深まると考えた。

Ⅱ．犯罪の心理的要因

精神的な健康の問題:

精神疾患や心理的な障害は、個人が犯罪行動に走る原因となりうる。例えば、抑うつ症

状や適応障害がある場合、個人の判断力や行動制御が低下し、犯罪に関与する可能性が高まる。心理的な障害であると、自己制御が困難である場合が多く、犯罪行為につながることがある。そして、怒り、ストレス、欲望をコントロールできないと、非合法な手段で対処しようとする。

反社会的な性格特性:

個人が他者との適切な対人関係を築けない、感情や欲求をコントロールできないといった反社会的な性格特性は、犯罪に結びつくことがある。これは幼少期からの行動のパターンや人間関係の形成に影響を及ぼす要因となることが多い。

犯罪の合理化:

犯罪者はしばしば自らの行動を合理化し、正当な理由を見つけようとする傾向にある。環境的な厳しさや差別に反抗する手段として犯罪という選択する。

報酬や利益の追求:

犯罪によって得られる経済的な報酬や社会的な利益が、個人を犯罪に対する欲を駆り立てることがある。特に経済的に困難な状況にある場合、非合法な手段が魅力的に映ってしまう。

環境的な要因:

周囲の環境が犯罪に誘因となる。貧困、不安定な家庭環境、犯罪が蔓延しているコミュニティなどが、個人の行動に影響を与え、犯罪に巻き込まれる可能性を高めることがある。また、周囲に反社会的な友人や環境が存在すると、個人は同調しやすくなり、犯罪行動に加担する可能性が出てくる。

社会的影響と同調圧力:

他者からの期待や同調圧力が、個人を非合法な行動に駆り立てる。特に若者の場合、同輩や社会的なグループの影響が犯罪に参与する要因となる。それは、グループ圧力が、犯罪に対する抵抗力を弱める力を持っているからである。

欠乏の感覚:

物理的・感情的な欠乏感が犯罪につながる。経済的な欠乏、愛情の不足、または自尊心の喪失が、個人が犯罪行動に走る原因となりうる。自分に対する価値感が低い場合、個人は犯罪によって自分を高めようとする。それゆえ、犯罪が一種のアイデンティティの構築手段となることが考えられる。

Ⅲ．少年の犯罪心理

少年期は人格が未発達であり、未完成。行動や意識の主体となる自我もまだ形成されていないのだ。これは、社会的環境の下で、他者と関わり、様々な学習・経験を重ねることで形成されていくものである。しかし、少年たちは、社会的環境と自己の相互関係を理解する能力に欠けている。自己認識ができていない状態だ。[1]

少年たちの非行は、成人の犯罪とは違い、SOS のようなニュアンスである。自分の考えをうまく表現することができずに、それを非行という形にしてしまう。家庭内で愛情を受けることができなかったゆえ、自尊心が低く、自分を大切にできず、人生に対して投げやりになってしまう。過度な制限を受けて育ったために、自分の感情の押し殺してきた感情が爆発してしまう。など、様々なケースが考えられる。[2]全てに共通することは、自我を確立しておらず、感情制御能力に欠けており、善悪の判断ができないことだ。

以上の人的要因に、家庭環境の悪さや親子関係の軽薄化、学校環境の悪さ、地域防犯対策の不備、などの少年たちを取り巻く環境的要因[3]が掛け合わさり、少年犯罪に至るのではないかと考察した。

Ⅳ．少年たちへのアプローチ

リーダーシップと自己効力感の醸成:

少年たちに対して、リーダーシップの重要性や自分の力で問題を解決できるという自己効力感を育てる。ポジティブな行動を選択する自信を生み出す要素が必要だからだ。自暴自棄にならず、自分自身を肯定的に見ることができるようになる思考が大切である。学校や地域のリーダーシッププログラムを導入し、少年たちにリーダーシップの重要性を学ばせる方法で実施。チーム活動やプロジェクトへの参加を奨励し、自分の役割を果たることで自己効力感を高める。

---

[1] 【谷口博「少年期の犯罪と自己喪失社会についての考察」参照 https://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/BS/0023/BS00230L093.pdf(2024 年 1 月 10 日閲覧)】

[2] 【碓井真史「病む社会と犯罪少年を考える」参照 http://www.n-seiryo.ac.jp/~usui/sigoto/kouenn/98.6.24.html　(2024 年 1 月 10 日閲覧)】

[3] 【板山昂・加藤潤三「少年犯罪の原因帰属に関する心理的研究」参照(2024 年 1 月 10 日閲覧)】

感情の教育と管理:

感情の正しい理解と表現方法を教え、怒りや欲望などの強い感情に対処するスキルを養う。感情の適切な管理が行い、問題行動を抑制しやすくなることが目的である。学校で感情教育プログラムを組み込み、感情の理解と適切な表現方法を教える。そして、心理カウンセリングやメンタリングプログラムを提供し、若者が感情に対処するスキルを向上させる。

認知行動療法の導入:

問題行動に対する考え方を見直し、健康的なパターンに変えるための認知行動療法を提供する。これにより、犯罪的な行動の背後にある思考パターンを理解し改善することが見込める。

家族との連携:

家族との協力を通じて、家庭環境の安定やコミュニケーションスキルの向上を図る。良好な家庭環境は少年の心理的な健康に寄与するからだ。専門のカウンセラーや心理専門家による個別セッションを提供し、問題行動に関する認知パターンを明らかにし改善させる。次にグループセッションを通じて、仲間との対話を通して問題行動の思考を見直す機会を生み出す。

学業や趣味のサポート:

学業や趣味を通して才能を発揮できる環境を提供し、ポジティブなアイデンティティの形成を促進。成功体験が犯罪を選択する可能性を減少させる。個々の少年の状況に適用することで、より具体的で効果的な予防策になると考えた。そこで、学業支援プログラムを設け、個別のニーズに合わせた学習環境を提供。地域センターやクラブを通じて、趣味やアクティビティに参加できる機会を拡充させる。

これらの考えた対策は単独でなく、地域全体や学校、家族と連携した包括的なアプローチが前提である。少年たちに寄り添う気持ちを伝え、お互いに理解し合うことで、効果を発揮するであろう。このプログラムは、成長段階であるからこそ可能なものであり、可塑性を見込んだ上で考案した。他者との関わりの上で、対人関係、感情制御能力、コミュニケーション能力を身につけていく。そうすることで、社会性や強調性が養われ、いかなる状況でも、犯罪という判断をしない自我が生まれるだろう。また、プログラムの評価と修正を継続的に行い、効果的な手段を見つけ出すことも必要不可欠だ。

Ⅴ．おわりに

このように、少年の犯罪心理は様々な要因が考えられ、一概には言えないのが現実である。人それぞれの人格で、思想で、行動選択をしている。ましてや成長段階の未成年であれば、社会性に欠け、総合的な判断能力は低いだろう。育ってきた家庭環境、生まれ持った心身など、数えきれないものが関わり合って、人格を形成してく途中だからである。万能のメンタルケアは存在しておらず、1 人ひとりに合わせたアプローチが求められる。そのためには、警察、地域、家庭が連携しなければならない。

少年犯罪を減少させるためには、その少年がなぜ犯罪という選択をしたのかという心理を追及し、理解することが前提条件だと考える。少年たちの心理状況に目を向けずに、効率的で現実的な改善方法を考え出すことは難しいと思うからだ。